

聖霊降臨後第23主日(特定26) 2010/10/31

聖ルカによる福音書第19章1節~10節

於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

今日の福音書は、エリコの町でのイエスさまとザアカイの出会いの物語です。ザアカイの人となりについては、徴税人の頭であり金持ちであったこと、そして背の低い男であったと紹介されています

イエスさまの時代には、パレスチナはローマの支配のもとにありましたが、徴税人はローマから税金の取り立てを請け負い、人々から過酷に取り立てました。しかも決められた額の4倍もの税金を自分の裁量で自由に決めて押しつけたというのですから、民衆は激しい憎悪の念と恨みの感情を抱いたでしょう。正に騙し取られた、奪い取られたと感じていたことでしょう。

それに加えてローマの手先となって金持ちになり、いかにも羽振りの良さそうな振る舞いを見せつけられては、人々の民族感情もはなはだしく刺激されることになったでしょう。徴税人は金のためにイスラエルを裏切った背信者として、神の民の交わりから排斥されたのです。

ザアカイはその徴税人の頭でした。人々から忌み嫌われた存在でした。だれもが関わりを持つことを避け、無視し、できることならいなくなしてほしいとさえ思っていたに違いないのです。

ザアカイが徴税人という仕事を選んだときに、あんな奴は消えていなくなればいいんだと、自分が人から思われるとは考えもしなかったのでしょうか。そんなことはなかったと思います。ザアカイは徴税人の頭にまでなった男ですから、ある程度の才覚が備わっていたに違いありません。徴税人が人々からどのように思われ扱われるかを承知の上で、この仕事を選びこの職に就いたはずです。

その理由は何でしょうか。金であります。それ以外にはありません。金の亡者となる道を選んだのです。この世の中で頼りとなるもの、確かなものは金以外にはない、人間がその本性を現すときに、本当に自分を助けてくれるものは何かと言えば、それは金だけであると、ザアカイは信じたのだと思います。それが彼の人生哲学でありました。人間同士の愛とか信頼関係とか、そんなものはイザとなったらどれほど頼りないか、不確かなものに過ぎないか、当てにならないかを痛いほど知っていたのだと思います。

しかし、ザアカイも初めからそのような人生観に従って生きていたわけではないでしょう。ザアカイという名前、これは「純粹」或いは「潔白」を意味すると言われます。当時、生まれた子どもに名前をつけるときには、親と同じ名前をつけるか、または一族の中のある人物からその名前を貰ってつけることが習慣でした。ですから、ザアカイの家の人々もイスラエルの信仰に純粹に生きようとしていた一族であったでしょう。或いは罪に染まらずに潔白さを保ち、正しく生きることを心がけてきた人々であったはずです。

ところがザアカイは、そのような神さまへの信仰一筋に生きる生き方に疑問を抱くようになりました。彼を取り巻く現実の姿を直視したときに、神さまを信じる人々

の上に神さまの正義が行われているとは、到底思うことのできない悲惨な状況が、いやでも目につくのです。神さまを信じて正しい生活を送っている人々が、傷つき苦しんでいる姿は、決して幸せな人生を喜び楽しんでいるとは見えなかったのです。

ザアカイがそのように感じるようになった切っ掛けには、ザアカイ自身が辛い思いをしなければならなかった体験があったのでしょう。ルカはザアカイのことを、背が低かったとわざわざ書いています。ほかの人より少しだけ小さかったという程度のことではなかったのでしょう。目立って小さかった。ほかの人たちの後ろからではイエスさまを見ることができないような、かなりのチビだったということです。

そのことがザアカイのコンプレックスとなって心につきまとい離れることがありませんでした。子どもの頃から、チビ、チビ、とからかわれ苛められてきた思いが、ザアカイの心の扉を閉ざし、人を信じる気持ちを失わせることになりました。信じることを不可能としたのです。

そのような体験をもとにして世界を眺めるならば、世界の歴史の中で小さな弱い民族であったイスラエルが辿ってきた道は、いかに辛酸を極めたものであったか、彼の胸には突き刺さるように感じ取られるようになったことでしょう。ザアカイの中ではイスラエル民族の歴史が個人的体験と一つに結びついて、いつも自分たちは欺かれ続けてきたという猜疑心と不信感となってうずまいていたのでしょう。

そんな思いの中で、一体、何を頼りにして生きていけばよいのでしょうか。確かなものをどこに求めたら良いのでしょうか。厳しい現実を生き抜くためには、金の力に頼るほかないと、金への執着が芽生えてくるのは必然だと言わなければなりません。

そんなザアカイの耳にも、イエスさまがエリコの町を通り過ぎて過ぎていくという噂が聞こえてきました。人々の背中が壁になってザアカイにはイエスさまの姿が見えません。そこで先回りをしていちじく桑の木によじ登り、道を進んでいくイエスさまを上から見ようとしました。イエスさまは、ザアカイに気がついて声を掛けます。「今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」

このやりとりを聞いていた周りの人たちは、皆、つぶやきました。「あの人は罪深い男のところに行って宿を取った。」だれ一人としてザアカイのことを信じようとする人はいないのです。下手に近づきになったら、言葉巧みに自分の稼ぎのことを聞き出されて、更に多くの税金を奪い取られるかも知れない。「触らぬ神に祟りなし」、なのです。ザアカイとエリコの人々との間には深い相互不信しかありませんでした。しかし、イエスさまはその家に進んでお泊まりになろうとするのです。

話は変わりますが、教会におりますといろいろな経験を致します。その1つに、たまに泊めてほしいと言ってくる知らない人があります。まだわたしたちの子どもがまだ小さい頃でした。冬の寒い時期に、既に休んでいたのですが夜中に電話が掛かってきて女性の声で、今、どこどこにいるのだけれど、終電がなくなってしまったので教会に泊めてほしいと頼まれました。その方がいる場所が教会までは歩いたらかなりの距離があるところだったので、やむを得ず、車で迎えに行きました。行ったのですが、どこにいるのか分からなくて見つけることができず、自分で何とかしたのかなと思い、帰ってきてしまいました。そうしたら、もう一度電話があつて、ま

だ待っているというのです。今度はその人のいるところの目印をはっきりと確かめて、改めて出かけて車に乗せて連れ帰りました。

わたしたち家族は2階に寝ていたのですが、1階の和室のこたつにその女性に寝て貰うことにしたのですが、1階に置いてあった大切なものは全て2階に運んで、万一、寝ている間に持って行かれても惜しくないものだけを残して、一晩、泊めたことがありました。

会ったこともない人を泊める、会ったことのない人の家に泊まる。これは大冒険です。極端に言えば、もしかしたら寝首をかかれるかも知れないのです。わたしは疑いましたが、その人が若い女性だったから泊めたのだと思います。どこかに安心できるものがなければ泊めることはなかったでしょう。

イエスさまは初対面のザアカイのところに泊まらなければならない、それが神さまのご計画だと言って彼の家に入って行かれました。その理由は、ザアカイもアブラハムの子なのだからというのです。神の友、信仰の父と言われたアブラハムです。その子どもだ、アブラハムと同じように神さまと親しく交わり、その信仰を受け継ぐ者だと認め受け入れられたのです。

人間同士はお互いの間に相互不信以外の何ものもありませんでした。あいつは罪深い男だと言ったのです。その男を神さまが信頼しておられる。それがザアカイの物語です。信じたくても信じようのない人間を「アブラハムの子だ」と言って信頼を寄せてくださる。人間には出来ることではありません。それは神さまにのみお出来になることです。神さまの可能性です。ザアカイのもとに、神さまの信頼が訪れたのです。「今日、救いがこの家に来たのです。」

だから、ザアカイは神さまの信頼を得て、財産不正に取り立てて得た財産半分を貧しい人々に施し、騙し取ったものを返済するという実践に向かうことができるようになったのです。ザアカイという名前が示す、「純粹」であり「潔白」である生き方へと帰ることができたのです。

この神さまの可能性にあずかることが、わたしたちの信仰生活に外なりません。